# 愛する人達

林芙美子

ばうばうとした野原に立つて口笛をふいてみても
もう永遠に空想の娘らは来やしない。
なみだによごれためるとんのずぼんをはいて
私は日傭人のやうに歩いてゐる。
ああもう希望もない　名誉もない　未来もない。
さうしてとりかへしのつかない悔恨ばかりが
野鼠のやうに走つて行つた。

萩原朔太郎といふ詩人は、もうすでに此世にはないけれども、此様な詩が残つてゐる。専造は、大学のなかの、銀杏並木の下をゆつくりと歩きながら、この詩

人の「宿命」といふ本の頁をめくつてゐた。
約束の時間を十分も過ぎたが、五郎の姿はみえない。
繁つた、銀杏の大樹はまるで緑のトンネル。枝々が両側からかぶりあつて、馥郁とした涼風をただよはせてゐる。
この日頃、胃の腑［#「腑」は底本では「附」］の恰好なぞ、考へたこともないほど、専造は食事らしい食事はしてゐない。
下宿代は滞り勝ち。――二三、友人にあたつてみた職業も、みんな向うから、閉め出しだと云ふ報告。その上、五郎という厄介な子供を抱へてゐては、宛然、

もう水の上の捨て小舟。といつて、その二、三の友人すら、現在のやうな世の中では、自身の体のなりゆきに、肝胆を砕いてゐるのがせいいつぱいである。

「旦那！」

専造はふつと身を引いた。

ぴたつと汗臭い人間が寄り添つて来たからだ。

休暇にはいつてゐる大学の構内はこの真昼間、あまり人通りもなく森閑としてゐる。

「旦那！」

「僕のことかい！」

「どうです？　煙草は要りませんかね？」

あわてて胸の釦をしめた。眼の前に、にゆつと、オレンヂ色の「光」の箱が二つ。専造は赧くなつて「いくらなの？」と、尋ねてみる。

「拾三円」

「さア、一箱の金もないな」

「ぢやア、五本、どうです？」

すでに、箱を開きかけてゐる。男の小指の爪が馬鹿に長い。頭は砂利禿げで並んでみるといやに背がひくい。

ポケツトを探して、六円五十銭よれよれの札をあはせて出すと、可愛いチヨークのやうな光が五本、男は

そのまま正門の方へ歩いてゆく。
五郎は何を躊躇してゐるンだ。また時計を見る。時計の汚れた硝子に、銀杏の緑が滴つてゐる。
あいつ、萎れきつて戻つて来るンぢやないかな。
あゝ、生きる苦しみといふものは……専造は、いつも、くづくづと鳴つてゐる胃の腑を、うるさい奴だと思つた。ふつと、立駐つた。
「専造さアん……」
人力車夫のやうな走りかたで、五郎が両の手を振り振り走つて来た。
「どうだ?」

「ゐたよ。いま帰つたとこだつて……」

「さうか。何かくれた？」

「手紙をくれたよ」

汚れたピケの帽子の下から、粗末なハトロンの封筒を出した。

葡萄のやうな、明るい少年の眼が、つぶらに動く。

封を切ると、拾円札が五枚出て来た。

「もう、その本、売らなくてもいいンだらう？」

「また、この次だ」

当分、御教授はお休みにして下さい。手紙には簡単にかう書いてある。

「君は、藤崎さん、御病気ですと云つたかい？」

「あゝ、云つたさ。——奥へはいる時、あのひとも度々だから厭だねつて、云つてたよ」

「マザーの方か？」

「うん」

愚や愚や、汝は弱き家庭教師也。専造は手紙を揉みくしやにしてポケツトへ入れた。

「浅草へ行つてみようか？」

「うん」

「歩けるかい？」

「大丈夫だよ……」

五郎はにやりと笑つて、片足を高くあげてみせた。専造は、煙草を一本出して唇に啣へた。だが、マッチがない。

「凄いンだねえ」

「いま、こゝで五本買つたんだよ」

「こんな処にも、煙草売り、ゐるの？」

「そりやアあるさ」

満足に、ものは食べないけれども、二人の若さは少しも狙喪［＃「狙喪」はママ］してはゐない。

「ブリヂイ・ウエル・サンクスだ……僕達はまアまア上の部だよ」

「えゝなアに？」
無慈悲な世の中とも思はれぬと、さて五十円を手にしてみれば、貧乏人にとつては、その場では兎に角大にこにこ、専造は、急に元気になつた。
だが、この金額の中から、間代を少し入れて、浅草で何か食べるとすれば、五拾円といふ金は、うたかたの如き金銭で、剰し得るものは何もない。これは御供への饅頭の如きものだと、専造は憂欝になつた。
「こゝへ来た次手に、やつぱり、この本も売つてゆかう……」
「どうして？」

「君は心配しなくてもいゝよ」
「だつて、兄ちやん、本はこの次と云つたぢやアないか」
まづ、二人は正門を出て、軒並みに本屋の前を歩いた。うつさうとした、山奥の水流をおもはせるやうな、ラジオの音楽が、きらめく水の色を髣髴とさせる。
五郎は、かなり歩きつかれて、頭の芯が痛くなつてきた。それに暑くて、咽喉もかわいてゐる。
とある、小さい書肆にはいつて、朔太郎の「宿命」を、なにがしかの金に替へた。全く、なにがしかの金額といふにふさはしい売り値で、専造は本を手離す時、

胸がうづいた。
　貧しい学生から、たつた一冊の本すらもうばつてゆくこの世のあはれさを、見参して、専造は、いつか口癖になつてゐる、「都に、骸骨あゑれ、犬を、猫を、むさぼり食ふはいつの日ぞ…………」と、妙な唄をくちずさんでゐる。
「専造さん」
「何だ」
「俺、眼がまひさうだなア…………」
「えツ？大丈夫か、おいツ！」
専造はあわてて、五郎を抱くやうにして、書肆の横

丁にある氷屋にはいつた。
「水を一杯下さいツ！」
紺絣のうはつぱりを着たねえちやんが、なみなみと二つのコツプに水を持つて来てくれた。思ひがけない親切である。
五郎は青い顔をして一息にその水を呑んだ。

四時半には、もう起きて雨戸を開ける。
南が吹いてゐる［＃「南が吹いてゐる」はママ］ので、馬鹿に暑い。だが、四囲は晴れてゐる。
ガスに火をつけると、只、ごうごうと臭い風が鳴つ

てゐるきり、ガス屋さんは、今朝も御倹約ね……。定子は、仄明るい格子窓に、朱色のぶちのある古い手鏡を立てかけて髪を結ふ。

（五郎ちやんは、いまごろどうしてゐるかしら。藤崎さん可愛がつてくれてるかしら……）

東京は、人間の屑の、掃溜めのやうな処だと、坂田のおばあさんは云つてゐたけれども、定子は、結局、田舎よりも東京がいゝといふ信念を持つてゐた。東京といふ処も、田舎のひとの寄りあひでかたまつた処だから、上海のやうに自由でのんびりしてゐる。

定子は、此家へ来た事を、一度も辛いと思つたこと

がない。夜になると、家の路地口を、酔つぱらひが歩いてゐたり、妙な家ではないかと、そつとのぞいていくひともあつて、一日ぢゆう賑やかな、この街が、定子には何となく面白い。「まだ茶は沸かないの？」

寝床からをばさんの声。

「あのウ、まだ、ガスが出ないンです」

「定ちやんは鼻つんぼだから、よオく、ガスへ鼻をくつつけてごらんよ」

「鼻をくつつけたンです」

何だか、ぶつくさ云つて、をばさんは黙つてしまつた。定子は、昨夜、洗つておいた洗濯物を、二階の物

干に持つて行つた。物干は、四方八方、風の海、広い焼跡は、草ぼうぼうや、畑になつてゐるのや、鉄屑の山や、何も彼も、それはそれなりに、うねうねと下町をいつたい、渺茫たる広野原の遠見。そのなかを、沈んだ色のビルデイングや、煙の出ない煙筒の林立。(何時もこの物干へ来ると、定子は何か歌ひたくなる。リンゴの唄や、雨のブルース、それから歌つてはいけない軍歌、峰子の歌ふ唱歌。)

あわてて階下へ降りると、薄暗い台所はおそろしくガス臭い。すぐ火をつけて薬罐をかける。茶を淹れて、をばさんの寝てゐる枕もとへ持つてゆくと、

「八時半に薪の配給があるの、わかつているわね。一束、七円五十銭よ」
「えゝ、わかつてゐます」
「今朝はすゐとんでもつくるかね？」
「えゝさうしませう」
「ガスが出るやうだつたら、昼のパンもふかしておくといいわね」
「えゝ、わかつてゐます」
ふくらし粉をつかへば、拾円で三日しかないといふので、ふくらし粉なしの、餅のやうに固いパン、これが、毎日のこと。――親仁さんの良吉は、二日ばかり

の商用で、福島へ行つて留守である。

六時になると、二階で雨戸を開く音がして、政子が起きる。

「昨夜、わたし、とても、こはい夢みたのよ。牛のおつぱいが、おてんたうさまから、ベロンとぶるさがつてるの……。脚なンてない、とても大きい牛なのよ」

梯子段の途中から、政子がこんなことを云ひながら降りて来た。よく眠つたせゐか、眼が澄んでゐる。内心、政子も、自分の眼の美しさは、充分自信があるのであらう。

朝の食卓についたのが八時。四囲がのぼせたやうに

暑くなりかけてゐる。

「いつたい、世間のひと、何を食べてるのかしら……」

定子が、ふつと、こんなことをいつた。

「力の及ぶ範囲で、やつてるンでせう……」

政子は、するとんがきらひなので、電気コンロに、フライパンをかけて、粉を焼いてゐる。

「定子ちやんは、昔のことで、何が一等なつかしい？」

「昔のこと、あら、そりやア、母さんのこと、どうして死ンだンだらうて、いつもさう思ふわ……」

「いゝえ、お母さんのことぢやないの。住んでたところとか、食べものとかつていふのよ。たとへばさうね。

新富の寿司だとか、下谷のポンチ軒のカツレツとか……」

「いやだねえ、また、朝から食べものの話だよ。――早く、食事を済ませて、大久保へ行つて、話をきめて来なさい。日中は暑くなつて、また出にくくなるからさア」

をばさんは、浴衣の袖を書生のやうに、肩にたくしあげて、長煙管で煙草を吸つてゐる。

「ねえ定子ちやん、上海の餃子もおいしいわねえ。焼餃子もよく喰べたわ。上海つて、どうして、あなに[#「あなに」はママ」おいしいものが沢山あつたんだもう

［＃「もう」はママ］……。わたし、飽きるほど食べておけばよかつた……。――あゝ、つまらないツ。何もなくてつまらないツ。――中国のひとで、わたし、岡惚れのひと、ゐたンだけど、今頃どうしてるかしら……あゝ、つまンないツ」政子は食卓の下に、かたちのいい脚を投げ出して、やけに団扇をつかつてゐる。

　まだガスが出てゐるので、定子は昨夜の肉湯をあたゝめに立つたが急に峰子に逢ひたくなつてきた。

　姉弟三人が、ちりぢりになつてゐる、いまの生活が淋しかつた。もう少し収入があれば、間借りでもして、三人で水いらずに暮したい……。

茶の間では、まだ政子が何か饒舌つてゐる。
「定子ちやん、今日は、日曜でせう？　大久保へ一緒にゆかない？　ひとりで行くのつまらないわ……」
聽て、洋服簞笥を開ける音。定子は、いま、ひといきで涙のあふれるところだつたので吻つとして小声でリンゴの唄をくちずさむ。
「ぢやア、定子ちやんも行つていらつしやいね」
をばさんのお許しが出た。肉湯にうんと胡椒をふりかけて、あゝこれに老列児の葉があればと、定子は上海の昔を思ひ出してゐる。
「お母さん、百円ばかり頂戴」

「あんな事いつてるツ、昨日も沢山持つて出て、このごろ、お前さん変だよ……」

「上海のことを思へば、何でもないわ」

「こゝは日本ですよ……」

「お金なくちやア、心細くて出掛けられやしないわ」

「大久保で、少し貰つて来るといいンだよ」

政子は黙つて母親を睨んだ。

丁度肉湯(スープ)が煮えたつて、おあつらへ向きにガスが止まつた。

政子の方は、それでも支度が出来たのか、すつきりした、黄ろい麻のワンピースを着込んで立つたなり、

フランネルで爪を磨いてゐる。
「定子ちやん、あとのことはいいわよ、早く支度なさい」
政子が優しい声で云つた。
「五郎君の姉さんはいくつ？」
「十八」
「美人かい？」
「きれいさ」
「そりや素敵だ。名前は何ていふの？」
国宗［＃「国宗」は底本では「図宗」］が、七癖の一癖で

ある、戸籍調べを始めてゐる。土産に牛の肝臓を百匁買つて来てくれたので、専造は中野の市場へ、野菜を買ひに行つた。

七輪の上では、鍋のなかに臓物がことこと煮えてゐる。漸くうまい匂ひがしだした。

「上海はいゝところかい？」

「いゝところさ……」

書架の本は、あらかた売り尽されて、棚の上には薄く埃が溜つてゐる。

国宗は、藤崎専造の中学の先輩で、早稲田の政治経済を出ると、すぐ兵隊に行き、この四月に復員して来

て、或る新興の、小さい薬種会社に勤めてゐた。

　復員して戻つて来てみると、友人のなかにはすでに戦死をしたものも幾人かあつたし、まだ復員して来ない者、田舎落ちをして、消息もよくは判らない者、それぞれに、敗戦のあとの人事は、まことに荒涼としてゐて、国宗は独力でやつと職をみつけたものの、身辺の淋しさをかこつ相手は、何といつても藤崎専造より他に友人がないのである。

　専造も、兵隊にとられたが、福岡へ着くと同時に終戦となり、すぐ東京へ戻つて来た。まだ学生で帝大の英文科に籍を置いてゐる。――故郷の鹿児島の家も焼

かれて、いまは仕送りも百円と限定されてゐるので、専造は、家庭教師と、小さい私塾の英語の教師をして糊口をしのいでゐた。

「やア、どうも遅くなつて……」

専造は汗を拭き拭き戻つて来た。みかけによらずの軽いキヤベツ一箇。海軍ナイフで、それを洗ひもせず、ざくざく刻んで鍋へはふりこむ。塩と、貴重なマアガリンを少し入れて、

「あゝこれで、何も懼れるものなしだ」

専造は満足さうに手を拭いた。

「おい、何か、いゝニユースはないか？」

「ないねえ……」
「何か、べらぼうに収入のある途といふものはないかねえ」
「まア、国宗と俺とで、二人組にでもなるかな……」
「二人組か……まア、それも長続きはしないな。——五郎君の、姉さんといふのは美人だつてねえ」
「うん、まだ少女だよ」
「少女はいゝぢやアないか。少女は現代の宝石だよ。世界到るところの少女と少年はいゝさ……」
五郎は国民学校の六年生。一ヶ月前から専造と二人暮しだが、鹿児島にゐるよりはずつと明るい生活だつ

た。

二年前に、上海で父を亡ひ、すぐ、母と、姉の定子と、妹の峰子と、故郷の鹿児島へ戻つて来たが、過労と肺キシの為に、母は鹿児島へ戻つて間もなく亡くなつてしまつた。

をさない、三人の、財産といふものも、少しはあつたのだらうが、坂田のおばあさんが握つてはなさない。

定子は五郎を連れて、去年の暮れに、無段で東京へ逃げて来た。上海時代の知人である、政子の家を頼つて・・・・。

をさない二人は、捨身の情熱で生れた東京の土地を

恋ひしたって…。

月にうき、雲はなにかぜ
おもふにまかせぬ世なりけり。
ちぎりしたことは夢に似て
はやくも、わかれとなりにけり。

破れ団扇のうらの、達筆な落書。
「君ぢやアないのだらう？」
「なに？」
「この文句さ、失恋だな、どう読んでも…」

「さる、偉いおかたのものさ」
「さる、偉いおかたのものか……」
鍋のものをさらへて、食べたあと、湯を足して、配給の粉をまるめたすゐとん、三人の有機体は海鼠のやうに平和になつた。
煙草は取つておきの、昨日の、大学煙草が三本、一本、一円三十銭だと思へば、仇やおろそかには吸へない。——国宗も珍重して吸ひながら、すぐ七癖の一癖がまた始つた。
「闇で煙草をどんどん売つてゐるくせに、配給がないといふのは、政府の最もずるいやりかただよ。——政

府のやつてゐることで、科学性なンて何一つありやアしないぢやないか、神まうでと同じで、御利益の匂はせ主義だし、民衆が興奮すると、すぐ、殺虫剤みたいなものをふりかけるンだからねえ。――何日も主食物を配給しないでおいてさ、街に出てみろ、馬鈴薯なンか、山のやうに売つてるぜ……」

人類は、自然のなかに愛されてゐるはずなのに、まづ、敗戦のあとの庶民には何の余沢もない。割のいゝものが、割のいゝ五十年の暮しをしてゐるだけのことだと、国宗はさかんに蔭弁慶の迷論を飛ばしてゐる。

だが、闇の煙草はなかなかうまい。

五郎は、鉱力や、木片をあつめてきて、こつこつと、電気の麵麭焼き箱をつくつてゐる。

「うまく出来るかい」

専造が破れ団扇をつかひながら見物といつた様子。

「これで、コードを少し買つてくれば出来るよ」

「よーし、買つてやらう。しかしふくらし粉は高値だなア」

「姉さんに貰つて来るよ」

「夏川つて家も、姉さんの話によるとけちんぼだつて云つてたよ」

「だつて、ふくらし粉位はあるだらう」

「あゝ、猛烈に甘い奴をたべたいなア。砂糖といふものの存在はどうなつたのかねえ。砂糖といふ奴は……」

国宗が、出窓に腰をかけて、急に甘いものを思ひ出したやうだ。五郎は、硝子瓶にはいつた砂糖の白さを思つた。坂田のおばあさんの家で、大切にしてゐる白砂糖を峰子と二人で盗んでなめた事があつた。舌の上にじゆんと広がつてゆく甘さが忘れられない。ふつくりした柔い薄団にくるまつたやうな、ぽつてりした砂糖の味……。

少しばかり紙に包んでおいて、峰子と二人で寝床で

も嘗めた。灯火の下でみると、きらきらした光が硝子の屑のやうでもある。

「何しても、働く場所がないと云ふ事は憂鬱だねえ。本郷の方も、当分駄目らしいんで弱つてゐる」［＃「」」は底本では「。」］

専造が如何にも弱つてゐる風に髪の毛をむしつた。

「まさか、路ばたでリユツクを下ろして、大学生が店を出すつてことも出来ないからうしねえ」

「うん」

「いつそ、どうだい？学校の方をやめてしまつて、本格的に就職運動をしてみたら……」

「生きるといふ事は、まづ難物だなア」
「死ねといつたつて、すぐ死ねもしないしさ……」
「全くだ。僕達のやうな学生のことなンか、世の中は少しも考へてくれやしない。問題が多すぎると云へば多すぎるンだらうが、もつと何とかねえ、——どうしても、五百円はなくちやア勉強は出来ない」
「うん」
「君は、いつたい、サラリーはどの位貰つてるの？」
「まづ、昔の課長級かな」
「ぢやア、大した事もないな」
「まづそんなもンだ、——食にとぼしい生活といふも

のは、第一に張りがなくなるし、人生に夢がなくなるね、自分が、若いンだか、年寄りなンだか、さつぱり判らなくなつてしまつたよ。有耶無耶にして十年、このまゝでいつたら乞食の生活と大した変りはないね。生きながら冥府に旅をしてゐるも同じの生活だよ。だから呑気は呑気だ……。人間、栄達、立身出世の野心がなければ、なかなか安気なものだ。毎日鞄をさげて出社して、夕べは茄子やトマトを買つて帰る。本は高いから買はないで、まア、朝の新聞の広告を、たンねんに、読んでゆくうちには眠くなつちまふ。眼が覚めるとまたまた鞄をさげて出社……何のことはない、己

れに逆ふものなしさ、氷屋のすだれの如き、さらさらした人生図だよ……」

丁度焼野を越した向うを省線が走つてゐる。

眼の下の狭い空地には唐もろこしの藪。四畳半の二階、それでもこよなき天国だ。赤ちやけて芯のはみ出た畳だけれど、間代にはべらぼうな値段がついてゐる。破れ畳に寝るだけで、本を売りつくして、そのうち、本箱もこの畳に吸収されようとしてゐる一日一日、崩れてゆく部屋のかつかうが専造には妙で口惜しいのだ。貧弱な運命といふものが、眼にはみえないけれども、軒の風鈴のやうに風のまにまに涼やかに鳴つてゐる。

これで、五郎でもゐなければ、底なしに荒さんで行くのかも知れない。
時々、それこそ、天の川のやうな訪問のしかたで、定子が五郎が逢ひに来た。[#「定子が五郎が逢ひに来た。」はママ] 専造はそれが唯一の慰さめだつた。
「このまゝぢやア何とも淋しいねえ……」
「妻君でも貰つたらどうなの？」
「食へないぢやアないか、女の干物は可愛想だよ」
ひどい見幕で国宗が坐りなほつた。
「藤崎さん配給ですよツ」
階下のお神さんが呼んでゐる。

「ものは何です？」
専造がたづねた。
「とろろこぶですつて……」
「はア……」
気が抜けたやうな返事をしたので、国宗も五郎もぷつと吹き出した。とろろこぶは重大であるかといふ問題が起きさうだ。
「僕、行つて来よう」
「またこの間みたいに高値いンぢやあないかな。お神さんに聞いてみて、高値いやうだつたら買はないで来るさ。――何しろ、べらぼうに配給品が高値いンだか

ら変だよ。――君、コンニヤクの粉をもとにした代用粉と云ふものを食つた事あるかね？　一貫目八拾円と云ふンだが、どんなものかねえ……」

「腹もちはいゝンだらうなア……」

五郎は鍋を持つて階下へ降りて行つた。

底本：「林芙美子全集　第十五巻」文泉堂出版
1977（昭和52）年4月20日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：林　幸雄
校正：花田泰治郎
2005年6月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。